

令和 2 年 6 月 17 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02298

研究課題名（和文）アイステーシスの経験と公共性 倫理的なものとの美学との相関性をめぐる基礎研究

研究課題名（英文）Aesthetic Experience and Publicness: Fundamental Study of the Correlation between Ethics and Aesthetics

研究代表者

小林 信之（Kobayashi, Nobuyuki）

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：30225528

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、主に以下の三点が主題化された。（1）現象学におけるエポケーの概念は、広義において、世界をまえにした「驚き」の経験であり、しかも「否応なく」おしこまれてくるような、受動的次元の明証であるとすれば、そうした経験の延長において、カント的な、美の「無関心性」概念を考えることができるのではないかと、（2）この無関心性概念は、レヴィナスによって独自の観点から解釈され、感覚の私秘性と、倫理的・公共的なものとの関係が問われたこと、（3）最後に、カントのいう美的次元での「主観的な」普遍妥当性のテーマと、メルロ＝ポンティの間身体性と両義性の現象学との連関について、である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

公共性をめぐる議論は近年わが国においても盛んになされ、社会哲学的研究の蓄積が整いつつある。しかし社会的・政治的文脈でのみ議論が完結するため、一般に「感性」的次元での考察が抜け落ちてしまっている。たとえば、ある歴史的事件にかんして「客観的」な記述と政治的評価をしめすことで、よりよい公共空間の形成に資することは重要であるが、しかし他方で、その出来事に潜在している無数の「物語」とかけがえのない個別的視点を忘れてはならない。一般的議論から抜け落ちてしまうそうした固有性を救いだすべき役割を担う研究が自覚的に遂行されることは少なく、その点で本研究は、現代において一定の意義を有していると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The following three propositions have been thematised in this study: (1) if the concept of epoche in phenomenology should be defined broadly as the experience of 'wondering' before the world, and the presentation of the passive dimension is forced upon us 'without choice', it should be possible in the course of such experiences to grasp the concept of Kantian 'disinterestedness' of beauty; (2) this concept of disinterestedness was interpreted by Levinas from unique perspectives and questioned in its correlation with the privacy of sensibility, as well as with the ethical/public existence; and (3) this can be correlated with the 'subjective' theme of universality in the Kantian aesthetic dimensions with the phenomenological concepts of Merleau-Ponty's intercorporeality and ambiguity.

研究分野：哲学・美学

キーワード：美 美的理念 反省的判断 合目的性 感性的なもの エポケー 美的なもの 感覚の復権

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

二十世紀後半以降、過度の情報化社会の発展とともに、固有で私秘的な領域を確保したいという個別化傾向と社会過程の極微化とがますます進展するにいたった。また、それと同時に、他者とのコミュニケーションによって形成される公共世界の構築が、いっそう困難なものとなりつつあるといった動向も顕著である。このような問題状況をふまえて、それをたんに社会心理学的症例として診断するのではなく、哲学的・美学的視点から原理的にほりさげて解釈することがいまにより求められている。つまり「公共性」の概念の再構築という現代的関心のもとに美的・感性的経験のもつ意味を究明することは、現在必要とされるもっとも重要な研究領域のひとつであると考えられたのである。

また本研究は、以上のように現代的課題にとりくむアクチュアルな企てであるばかりでなく、より基礎的な研究を内包しており、そうした原理的観点から、明治以降、重層的にくりひろげられてきた「美学」という学問領域の再構築を旨とするものでもある。すなわちギリシア語のアイステーシスという概念がふくみもつ、原点としての内実をたかえって根源的思考を深化させるとともに、現象学をはじめとする哲学的方法論との関連においても、感性的経験領域の反省的理解の学という意味での美学の役割を問うものである。

以上が、本研究課題を構想するにいたった背景をなす考え方である。

2. 研究の目的

他者との関係性によって構築される公共空間と、個別的・私秘的経験(とりわけ感性的・美的経験)はどのように連関するのか、という問いに一定の答えをあたえることが最終的に本研究の主目的である。いいかえると、本研究は、これまでともすると純粋化され形式主義的にあつかわれがちであった美学的・感性的経験を、公共性の問題との連関において解明しようとするものである。こうした試みは一方で、現代における倫理的可能性の一形態を探求することにつながっているが、また他方では同時に、具体的な文化現象の在り方に一定の解釈をくわえ、創造的な展望を切り開くという意味をも担っている。そして以上をふまえた上で、最終的には、アイステーシス(感性的・美的なもの)の学としての美学を新たに構築することを旨とするものであり、解釈学的な意味において伝統の「反復」の作業を現代の多様な諸問題の文脈のなかで試みようとするものである。

以上をふまえた上で、本研究が照準をさだめる哲学・美学思想は、大きくつぎの二点に集約される。

(1) カント『判断力批判』の「美の分析論」が現代においてなお有している思想的射程を推し測ること。このことを主目的としつつ、そこから美的経験と公共性という一般的議論を切り開くこと。

こうした研究目的は、カントを起点とする西欧の美学思想の伝統において、美的判断や美的理念や共通感覚といった諸概念がどのように継承されてきたかというテーマに接続するものである。つまり本研究は、一種の公共性・共感性の理念として考えられた「美」について考察し、『判断力批判』のもつ現代的意味を提示すると同時に、それにたいして加えられてきたさまざまな批判(たとえばニーチェの『道徳の系譜学』における批判など)を検討するものである。さらにこうした問題系は、美的人間と倫理的・宗教的人間を対峙させる問題意識(キルケゴールなど)にも連なっており、重層的な視点から美的なものを主題化することが求められた。以上のように、まず第一に本研究は、公共性に関する現代的関心に基づいて、過去の美学的伝統を照射することを目的とするものであり、一種の解釈学的「破壊」の作業を意味しているともいえる。

(2) 現代の現象学的思考を、カントの議論と連関させ、そこから新たな研究の展望をえること。具体的には、フッサール、ハイデガー、レヴィナス、メルロ=ポンティといった哲学者の思想を厳密に解釈することを目標とした。そしてたとえば、美的経験と(広義に解された)現象学的エポケー、美的なものにかんするハイデガーの存在論的解釈、デリダによる美の否定性をめぐる思想、レヴィナスの感覚論、カントの美的理念とメルロ=ポンティの感性的理念の比較研究、等が個別の研究項目としてたてられた。

3. 研究の方法

研究目的を実現するにあたって採用された方法と研究の道筋はおおよそ以下のようにまとめることができる。

(1) まず本研究の遂行に必要な基礎資料を収集し、整理すること、さらにそれらを厳密に分析理解することが、なにより重要であった。そのために早稲田大学以外に散在する研究資料の収集と読解、西欧哲学史・美学・美術史関係資料の図書を本研究機関(早稲田大学文学学術院)に集約し、保管することがなされた。このように研究の方法論としては、過去の研究資料の実態調査をふまえつつ、さらなる原典資料の発掘と解釈等、地道な基盤研究を第一におこなっていく

オーソドックスな人文科学的研究方法である。

研究テーマの中心としては、とくにカント美学研究の膨大な参考文献を閲覧し、それとの比較において、現代西欧における現象学的研究の取り組みを考察するといったことがあげられるが、そうした手順にそって、基礎的文献資料が集められることになった。それゆえ、ここであつかわれる文献・資料は、西欧哲学や美学芸術理論のみにとどまらず、きわめて広範な(いわば学際的な)領域におよぶものとなった。

(2) さまざまな機会に開催された学会や研究会議、セミナーやシンポジウムに参加し、多様な研究者との議論をつうじて知見を広めること。また、そうした場において積極的に研究成果を公表し、ひろく批判的検証の機会を得ること。研究の方法論として、このような研究者共同体内部での議論の場に身をおくことが何より必要であった。具体的には、2019年11月に岡山大学にて開催された日本現象学会への参加と研究成果の公表とが大きな意味をもつこととなった。

(3) 以上を踏まえつつ、積極的に研究成果を発表し、そのことをつうじて、研究者相互による成果の検証と、さらなる展望の獲得が企てられることになった。なお、本研究の遂行と公表全般にわたって、文献資料の整理や、コンピュータへの入力、また各種の連絡調整業務など、多様な作業が必要であり、研究助手的な立場の協力者もふくめ、共同作業としての側面もつものとなった。

4. 研究成果

(1) 美的経験と現象学的エポケーとの連関にかんする諸テーマ。

第一に本研究は、これまで本研究者がとりくんできた美学・哲学的研究を継続し、アイステースと美的なものの概念にかんする現象学的テーマに焦点をしばって展開するものである。とくに着目したのは、現象学におけるエポケーの概念と美学的な無関心性概念との連関である。フッサールの現象学的エポケーは、古代の懐疑論やデカルトの方法的懐疑とおなじライン上に、だがそれらを包括する批判的・学的観点をふくむものであった。しかしより広い意味において、世界をまえにした驚きにはじまる経験としてエポケーを考えるとすれば、そこには受動的で先意志的な次元にかかわるテーマがひそんでいるといえよう。エポケーとはいわば、「否応なく」おしせまってくる明証なのである。

こうした広義のエポケーの延長において、本研究でとくに主題化されたのは、知覚経験の純化としてのアイステースの経験(美的・感性的経験)である。すなわちカントの無関心性の概念、詩的なものの経験、あるいはベルグソンのような、有用性と社会性の原理にからめとられた知覚を遮断し距離をおく態度(デタッシュマン)等々をその例としてあげることができる。受動的な不意打ちによって意志の停止がもたらされると同時に、美的な態度とアイステースの経験のただなかで、あらたに世界に目がむけられる。驚きとともに、住み慣れた日常の事物への気づきが生じ、だが同時に、人間的意味の被覆をとりさられた無意味性の世界が垣間みえる。そして日々の生活世界が脱文脈化され、世界における物と、世界内で生起する出来事とが、ことさらにわたしたちにおしせまってくるのである。わたしたちが美的なものを注視し、そのものに耳をすませるのも、そのようなエポケーの経験にうながされたからであろう。

以上のように、これまであまり関連づけて論じられることのなかったふたつの概念の連関をことさらに主題化することで、美学上の新たな問題領域をうかびあがらせることにもなったと考えられる。

(2) エマニュエル・レヴィナスの感覚論と公共性の問題。

本研究にとって重要な意味をもつ思想家として、とくにフランスの哲学者エマニュエル・レヴィナスがあげられる。かれの思想を感性的なもの(the sensible)の視点からながめてみるのが、第二の課題となった。かれの「感性論」は、受動性としての感受性と主体性の概念を根底からとらえなおすようなラディカルな思考につらぬかれている。この意味で感性的なものにかんする主題系はレヴィナスにとって一貫して中心テーマでありつづけたというのが、本研究におけるわたしなりの基本的テーゼである。このテーゼにしたがいつつ、これまでのレヴィナス研究にとっては自明事に属することもふくめ、かれの思想、とりわけ『全体性と無限』と『存在するとは別の仕方』に結実した思想をたどりなおすことを試みた。そのさい、たえず念頭においた問いは、以下の三点にまとめることができる。

一、そもそもなぜ感覚の固有性がレヴィナスにとって重要性をもつにいたったのか。つまりレヴィナスにとっての感覚経験とは、他者への接近不可能性と内在化の拒否を含意するような、闇にふれる感触を意味していたのではないか。

二、レヴィナスの思想をながめわたしたとき、なぜ倫理的関係の主題化で完結せず、さらに、超越の享受としてのエロスの関係へとすすまねばならなかったのか。つまり感性的なものとの超越との関係性にかんする問いである。

三、後期レヴィナスの思想にとって中核的な意味をなす「無関心性(ないし脱内存在)」の概念はカント以来の伝統にかんする本論の議論の全体のなかになどどのように位置づけられるのか。

これら三点の問いにとりくむためにまず、レヴィナスにとって感性的なものとの問題がどのよう

な文脈で登場するのか、確認する作業からとりくんだ。さしあたりそれは、知覚によってわたしたちの感覚経験がどこまでくみつくされるのかという現象学的問いに集約できるのであるが、そうした論点を起点として本研究は、感性的経験と倫理にかんする二本の論文にまとめ公開した。

(3) 美的経験の普遍性の問題。

第三のテーマとして本研究がとりくんだのは、個別的なものの領域に属する美と公共性との連関の問題をめぐって、とくにカントの美の分析論を現代の現象学的観点からほりさげつつ、さらなる展開をはかることであった。その成果は、2019年度の日本現象学会において「美的なものの概念をめぐって カントとメルロ=ポンティの思考から」と題した研究発表によって公開された。

『判断力批判』においては、趣味判断の第二の契機として、判断の論理的「量」が主題化され、美的・感性的次元での普遍性が論じられている。しかもそのさい判断される「美しいもの」は、身体的・感性的な感覚によっても、概念によっても汲みつくることができず、両者のあいだ、ないし媒介として、いわば両義的なものとして考察されている。こうした両義性や媒介性に連関するテーマは、カントにおいては顕在化していないにしても、そのまま現代の哲学的問題意識にひきつがれており、たとえば理念的なものの始原を間身体性の次元に問い求めるといった現象学的課題に接続するものであるといえる。今回の研究においては、とくにメルロ=ポンティの探求に焦点をさだめた。じっさい、カントのいう合目的的自然に呼応する主観性の、あくまで暗黙の次元での開示性（共通感覚）は、メルロ=ポンティの言葉でいいかえれば、「沈黙のコギト」に呼応するものであろう。つまり自然の合目的性は、わたしたちを統制的にみちびくような一種の理念であり、しかもそれは、わたしたちの内的な感情において調和的に呼応し共鳴するがゆえに、美的な次元で「主観的な」普遍妥当性を要求できるとカントは考えたわけであるが、このような考え方は、メルロ=ポンティの両義性やキアスムといった概念に通ずるものであろう。本研究は、以上のような展望のもとに、個別性と公共性、美的なもの倫理的なものとを媒介する「共通感覚」をめぐる議論を考察するものとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 小林信之	4. 巻 11
2. 論文標題 ハイデガー芸術論の射程 『対をなすもの』の問題系から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Heidegger Forum (電子ジャーナル)	6. 最初と最後の頁 71-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林信之	4. 巻 1
2. 論文標題 手仕事と物=語 ひろいのぶこの作品世界	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ひろいのぶこ退官記念論集	6. 最初と最後の頁 6-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林信之	4. 巻 106
2. 論文標題 エポケーと無関心性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 PHILOSOPHIA	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林信之	4. 巻 63
2. 論文標題 感覚の復権 -レヴィナスにおける表象批判、超越の享受、脱=内存在-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 1332 - 1317
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林信之	4. 巻 40
2. 論文標題 感覚の復権 -レヴィナスにおける表象批判、超越の享受、脱=内存在- (承前)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 哲学世界	6. 最初と最後の頁 1-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林信之	4. 巻 3419
2. 論文標題 書評「樋口聡、G・ゲバウアー、R.シュスターマン著『身体感性と文化の哲学』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林信之	4. 巻 第42巻
2. 論文標題 美的なものの普遍性をめぐって 両義性と感覚の独我論 (補遺)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『哲学世界』	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 小林信之
2. 発表標題 美的なものの概念をめぐって
3. 学会等名 日本現象学会第41回研究大会 (岡山大学・津島キャンパス)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----